

## 高校生の情報化と国際化に対応できる コミュニケーション能力育成に関する実践的研究

－ コミュニケーション能力を伸ばすためのプレゼンテーション指導のあり方 －

野村由佳（大阪国際大和田中学・高等学校教諭）

～ はじめに ～

現代人の日常生活はプレゼンテーションであふれている。日々繰り返される人間生活行動のほとんどは相手が存在し、コミュニケーションを必要とする行動であり、自分自身の意見を表現し相手に理解してもらうために行う活動である。つまり、これらはプレゼンテーションであると言える。よって、ビジネスの場面に限らず日常生活においても極めて重要だと言えるプレゼンテーションであるが、日本人はこれまで、欧米人と比べプレゼンテーション能力が低いと言われる傾向にあった。明確な意思表示、自己表現をすることが苦手と言われてきた。日本人は、その歴史的背景からも、憲法十七条の第一条に「和を以て貴しとなし忤ふることなきを宗とせよ」と唱えられたように、聖徳太子の時代から周囲の人々と協調することが美徳と見なされ、その結果自己主張が苦手になった、と言われてきている。また、幼少の頃から学校教育の中にプレゼンテーションが組み込まれている欧米の教育現場に比べ、座学・講義型の日本の教育では生徒が実践的にプレゼンテーションを学ぶ機会が少なかった、とも言える。

情報化・国際化の進む現代日本においては、これまで以上にプレゼンテーション能力向上の必要性が叫ばれ、高校生の教育現場にもその波は及んでいる。現在、総合、情報等、多科目においてプレゼンテーションの授業が学校教育に組み込まれてきている。しかし、人前に立ち自己表現することに慣れていない生徒も、特にその指導方法の教育を専門的に受けてきていない指導者側も、戸惑うことが多いようだ。情報化が進み、ビデオ・DVD・パーソナルコンピューターを用いたソフトやツール等、さまざまな教材の利用が可能ではあるが、生徒のプレゼンテーション能力育成に効果的な指導法にたどり着くことは難しく、指導者側の研修も実際的なものが少ない。

本プロジェクトでは、これらの現状を改善し、高校生のコミュニケーション能力育成とともに、指導者の指導能力伸長をも視野に入れ、活動を行ってきた。平成15年に第1回の取り組みを開始し、本年度で4年目となる。これまで3年間にわたる活動において得られた成果や反省をもとに、より良いものとするべく本年度も活動を続けてきた。以下において、本プロジェクトの活動目的、概要、成果、またこれからの課題をまとめ、考察する。

## 第1章 本研究の目的と方法

国際化・情報化が進み、盛んにプレゼンテーション能力育成が重要視されるようになった昨今の教育現場ではあるが、その教育現場が抱える問題はまだまだ大きいと言える。

プレゼンテーションは人と人とのコミュニケーションの上に成り立つものであるが、現在の学校教育においては、その基礎となるコミュニケーション能力の開発が見落とされがちである。多くは課題とされるテーマを調べ、まとめ、発表することがプレゼンテーション教育となってしまうようだ。そこには相手に自分の意見を伝えたい、というプレゼンターの意味が伝わってこないように思われる。

本来、プレゼンテーションの理想の形とは、単に自分の意思表示をすることではなく、相手に意思・意見・アイデア・情報を示し、相手に理解してもらい、さらに相手の意見・態度、ついては心を動かす自己表現・自己演出技術である。自分の思いを伝えようとすれば、プレゼンターはその内容を吟味し、相手に理解してもらおうとその立場に立ち考え、暗記した説明形式の言葉ではなく、思いをのせた自分自身の言葉でプレゼンテーションを行おうとするはずだ。そのためには、相手と円滑なコミュニケーションを持つことが大前提となり、その基礎となる点を落としてしまえば、良いプレゼンテーションとは言えない。相手を説得できるプレゼンテーション能力の育成のためには、コミュニケーション能力を根底として、自分の思いをしっかりと持ち、テーマや目的に沿って論理的に考えをまとめ、それを相手に分かりやすく資料の上で展開し、相手を引きつけられる表現で効果的に伝達する技術が必要となる。また、その技術体得のためには、体験学習が必須である。

生徒がこれだけの技術を会得するためには、当然、指導者側にも効果的な指導を施す技術が必要とされる。インターネット、パワーポイント、第3世代携帯に見られる携帯電話の多機能化など情報メディア、デジタルメディアが飛躍的に進歩し、プレゼンテーション教育に利用できる教材は様々だが、効果的な指導法を学ぶことのできる機会は残念ながら多いと言えない。生徒の技術向上のためには、まず指導者の研修、効果的な指導方法の確立にも力を入れる必要があると考えられる。

本プロジェクトでは、これらの問題点を改善するべく、新時代に対応しうる高校生の説得力のあるプレゼンテーション能力育成と指導者の指導能力伸長をも目的に、4年にわたる活動を続けてきた。プレゼンテーションの中でコミュニケーションが果たす役割を多角的にとらえ、多数の参加指導者によって練られた全5回の実践的な活動を通し、段階的な「考える、まとめる、話す、見せる、伝える」のコミュニケーション能力育成を試みてきた。また、事前の入念な企画とセッション後の感想を基にした参加指導者全員による振り返りを行うことにより、より良い指導方法を研究し、指導能力向上を目指している。

本年度の活動には、大阪の7校から数名ずつの生徒、各校からの教員、他の中学校・高校から20名程度の教員、さらに教師を志す大学・大学院生が参加し、セッションごとにそのセッションを企画・運営する複数のホームルームティーチャーを定め、その指導者を中心に活動を進めた。セッション内では生徒も指導者も、プレゼンテーションの実践を指名されれば絶対に断れないことを原則とした。

普段の学校生活にはない活動や環境、参加メンバーの中で、コミュニケーション能力育成に障害となる緊張を和らげるためにも、参加生徒と指導者を毎回異なるグループに振り分け、多くの人とコミュニケーションをとれる雰囲気作りにも力を入れた。毎回のセッション後には振り返りの時間を設け、生徒も指導者もその場で電子掲示板（VBB = Virtual Brainstorming Board）に感想を書き込み、単に活動が通り過ぎていくことなく、その回で得た成果と反省を振り返り、次回に生かせるよう実践した。最終回のセッションとなる第5回は、平成15年度当初から続いているプレゼンテーション大会「プレゼン甲子園」を行った。各高校別チームが、全5回のセッションで得、磨き上げた能力を用い、決められたテーマに基づき事前に準備をし、プレゼンテーション能力を競いあった。どの参加校も第1回とは見違えるほど力を伸ばし、本プロジェクトの意義を証明したように思う。

## 第2章 各セッションの目的・概要・成果・課題

本プロジェクトとして全5回にわたり行ったセッションにおける目的・概要・成果・課題をそれぞれのホームルームティーチャーの検証をもとに、以下に示す。

### 第1回セッション



名札と3枚のシール

目的：

アイスブレイクを兼ねた交流と、自己を少し違った形で表現することを体験する。

概要：

- (1) 所属学校と名前の書かれた名札に、100種類ほどのイラストシールから任意の3枚を貼り付けることでオリジナル名札を作成した。その名札を、グループ内で各人が紹介し合い、グループ代表を選出して、全員の前で披露した。自己紹介ではあるが、その手段にシールを導入することで、緊張感からの開放、表現に対するストレスをできるだけ取り除き、シールの手助けにより人前での「情報伝達」のスムーズさを見出した。なお、このセッションは、生徒ばかりでなく教員や大学生も同様に行った。
- (2) (1)で出来たグループ内の教員を取材し、その教員を紹介する「他己紹介」をおこなった。取材には、取材する側に「伝えてみたいこと」があるのと同時に、取材する側には「伝えられてもよいこと」と「伝えてほしくないこと」がある。取材を通じて、「情報伝達」の的確な選別方法を見出すこと狙った。取材を通じて、初対面ながらコミュニケーションが密になり、取材された側も「うまく自分を伝えてもらった」と概ね満足そうであった。
- (3) 各校にわかれて、それぞれに同じ地図を配布し、「ハンバーガーショップ開店計画」をお願いした。各校がその計画場所を発表することで、第2回セッション以降、幾度とおとずれるプレゼンの体験になるように考えた。



ハンバーガーショップ計画発表

成果：

3つのセッションを通じて、生徒たちと学生たちと教員たちが、「このメンバーでセッションが続いていくこと」、「情報伝達にはさまざまな手段があり、方法があること」を感じた様子が見受けられた。

## 第2回セッション

目的：

所属団体・趣味・年齢・出身など、項目分けした自己ではなく、最も自分らしい部分（今回アピールしたい部分）を発見し、その部分を効果的にプレゼンテーションする経験をする。自分の記憶や経験のなかの「情報」をとりだすことにより、「情報」という概念の見直しをし、アピールしたい点を、最も効果的に伝える方法を工夫することで、プレゼンテーションの基本を学ぶ。また、各校から集まったメンバーが、お互いを理解できるようにする。



This is Me !

概要：



This is Me ! をケント紙に

前回の最後に宿題として、各自2分間で、自分の最も自分らしさが伝わるところを、プレゼンテーションできるように考えてくるよう指示した。実際に見せたいものがあれば持参し、一般的な自己紹介の型にはまらぬように注意を呼びかけた。セッション当日、受付で、カラーリングに通したコメントカード「ここがよかった！」「こうすれば、もっとよかった！」を渡した。セッション前半には教師2名が「This is Me !」

のデモンストレーションを行い、それに対して、他の教師がコメントをした。先に配ったリングの色で班分けをし、班の中で「This is Me !」を発表した。班に1名教師が入り、全体の進行をし、1人の発表ごとに、班員はコメントカードを記入し、全員の発表後、発表者に手渡すよう指示した。班の中で発表代表を1名決め、代表者は班員からのコメントカードを参考に、班にいた教師のアドバイスをうけつつ、「This is Me !」をブラッシュアップ（手を加えてより良いものにする）した。他の生徒は別室に移動し、自分の「This is Me !」をケント紙1枚に表現する作業をした。30分後、全員が1部屋に集合し、生徒の緊張を和らげるため教師2名のデモンストレーションをはさみ、その後、各班代表の発表を行った。その都度、ブラッシュアップ担当の教師がコメントし、最初の発表のどういう点をいかしたか、どういう点に注意してブラッシュアップしたかを発言した。最後に教師1名によるエキシビションを行った。ホームルームティーチャーによってコメントをし、まとめとした。

場所を移し、ドミニカ共和国に海外協力隊員として赴任されている村上先生と、スカイプによる対話を行った。

成果：

複数のホームルームティーチャーが、事前にメールなどを使って打ち合わせをし、当日の進行を分担して行った。現役の大学生が参加したことで、セッションが若く活気のあるものとなった。生徒は、従来のプレゼンテーションの枠を離れて、自由に表現することを学んだ。

課題：

目立つ生徒が選ばれる傾向があり、代表にならなかった生徒の最初のプレゼンが活かしきれない。今回は紙資料におとすということを試みたが、口頭のプレゼンテーションから紙上への移行が難しく、やはり充分ではなかった。インパクトの強さだけでなく、伝えようという動機と、伝えたい内容が充実しているものに注目していくようなプログラムに、今後改善できれば、と思う。

第3回 セッション

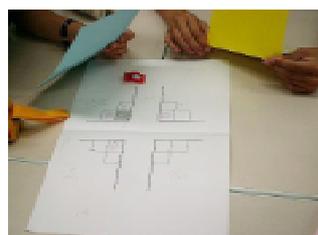
目的：

プレゼンテーションやコミュニケーションを構成するさまざまな要素に着目し、段階的に課題をこなしていくなかで総合的な力を身につける。4つの課題それぞれの目的は次のとおりである。

- (1) グループワークにおける個々のメンバーの必要性や、コミュニケーションの重要性、また効率的なグループワークに必要な要素について意識する。
- (2) 情報を相手に正確に伝えるために、伝える順序や表現方法にも工夫が必要であることを意識する。そのため、ジェスチャーや表情などの非言語情報を使うことを一切禁止し、言葉だけを使って図形を相手に伝える。
- (3) 自分自身が発信する言語以外の情報、つまり非言語情報の重要性について意識する。
- (4) 与えられた情報をそれぞれの立場で取捨選択し論理的に組み立てる力と、プレゼンテーションによって相手を説得する力をつける。

概要：

『4つの関門』と題し、(1)コミュニケーションゲーム (2)図形の伝達 (3)感情表現 (4)記者会見の4つの関門を企画した。



(1) コミュニケーションゲーム

(1) グループのメンバーで協力しながら1つの課題を達成していく関門である。4～5人のグループに分け、グループのメンバーにそれぞれ異なる情報が書かれたカードを配布した。カードには課題を達成するために必要な情報がランダムに書いてある。グループのメンバーは協力し、互いの情報を共有、整理することで課題に対する答えを導き出す。最後にワークシートを用いて各グループで振り返りを行った。

(2) 図形を言葉だけを使って伝達する関門である。4～5人のグループを再編し、グループの中の1名が紙に書かれた図形を言葉だけでその他のメンバーに伝達する。はじめは、伝え手が1人で考えて伝達を行い、次に聞き手のうち1名が「どのように伝えれば良いか」などのアドバイスを行ったうえでもう1度伝達を行う。最後に聞き手からの質問を受けながら伝達を行うという手順で、段階的に図形を伝達した。

(3) 指定された感情やシチュエーションでセリフを言い、意図した感情を相手に伝える関門である。4～5名のグループに分かれ、1人ずつ順番に指定された感情を表現する。それを受けてその他のメンバーは感情がうまく伝わったかジャッジを行う。グループごとに感情表



(3) 感情表現

現を行うが、感情の提示は全体で行うことで活動にテンポと盛り上がりを生じさせた。ジャッジが行われた後には、各グループについての指導者からのコメントがあり、閉門終了時には全体で振り返りを行った。

(4) 公園改造計画について、賛成派と反対派の広報担当者が住民に対して記者会見を行い、それぞれの立場で住民を説得するという閉門である。4～5名のグループに分け、1名を賛成派の広報担当者、1名を反対派の広報担当者、残りを住民というように役割分担する。広報担当者は、指導者と共に、与えられた情報をもとにして自分の立場から住民を説得するための会見内容を考え、それぞれのグループで住民に向けて記者会見を行う。この際、数名の指導者がマスコミに扮して各グループに入り、住民担当の生徒と共に、会見を聞いた後に広報担当者に質疑を行う。会見終了後、マスコミに扮した指導者から住民担当の生徒にインタビューが行われ、生徒は自分の意見を住民の立場で回答する。その後、各グループの賛成派担当者と反対派担当者の中から1名ずつ代表者を選び、全体の前で記者会見を行った。

成果：

- (1) それぞれの持つ情報が課題達成に必要な不可欠であることから、全員がおのずとグループワークに参加できた。加えて、各自の持つ断片的な情報を組み合わせ、話し合いの中で課題が達成される過程を経ることで、グループワークにおけるコミュニケーションの重要性や、目標に向かい一致団結して課題をこなすことの充実感も感じる事ができた。振り返りの内容を全体で共有することで、効率的なグループワークには何が必要であるかの意識付けを行った。
- (2) 図形を正確に伝えるためには、その配置や大きさ、長さなど、さまざまな情報を相手に伝える必要がある。伝え手は、自分が「伝わる」と考える情報と、実際に相手に「伝わる」情報との違いを感じ、「伝える」ために言葉や表現方法、伝達の順序を工夫するようになった。また、聞き手の意見を導入する場面を設定することで、伝え手の気づきと聞き手の主体的な参加をうながし、双方が発展的に課題に取り組めた。加えて、情報伝達におけるコミュニケーションの重要性についても意識することとなった。最後にワークシートを用いた振り返りを行い、それを全体で共有することで目的の明確化に努めた。
- (3) 人が伝達する情報の中で、顔の表情や声の質、しぐさや態度など非言語の情報が占める割合は大きく、同じ言葉であってもその表現方法により、相手に伝わる情報が変化することもある。そこで、同じ言葉を指定された感情で言わせることで、非言語情報を意識して発信させ、的確に情報を相手に伝えるためには言語以外の情報にも気を配る必要があることを意識化させた。また、それぞれにジャッジやコメントを導入することにより、自己の表現に足りない部分や情報の伝わり方の違いを明確化できるように工夫した。活動中ははずかしがってなかなかうまく感情表現のできない生徒もみられたが、活動後の振り返りでは、感情を伝えるためには表情や口調、動作が重要であるとの意見が多くみられ、それぞれに目的を意識しながら活動に取り組んだ様子がうかがわれた。
- (4) 記者会見の担当者に与えられた情報には、賛成派、反対派のどちらかに優位に働くと考えられるものや、中立的なものを含めさまざまな情報がある。どの情報を選択し、それらをどう組み立

ててプレゼンテーションを構成するかが、住民の意見を大きく左右する。また、記者会見の仕方  
もその結果に大きな影響を及ぼす。会見終了後に住民がどちらの意見に心を動かされたか、また  
何がそれにつながったのかを意見交換することで、そのことを意識することができるようにした。  
また、会見後の質疑応答や住民に対するインタビューを設定することで、記者会見の担当になら  
なかった生徒も主体的に活動に参加し、受け取った情報をもとに自己の意見をまとめ、情報発信  
を行う機会をつくるよう工夫した。

課題：

(4) 閉門終了後の振り返りでは、住民担当だった生徒から「次回は記者会見の担当をしてみたい」  
という意見がみられたことから、住民担当の生徒のモチベーションをあげるための更なる工夫が必要  
である。また、すべての生徒がそれぞれの立場を経験できるようなプログラム設定が課題であると考  
えられる。

#### 第4回セッション

目的：

本セッションは「プレゼン甲子園2006」に向けた最終セッションとなる。前半は、個人での発表で、  
人前での発表の仕方の振り返りをする。後半は、各学校単位で発表するプレゼンテーション「学校紹  
介」を行い、プレゼン甲子園で用いる Power Point を用いたプレゼンテーションの経験をするこ  
となる。

概要：

前半では、「夏休みの思い出」について、参加生徒全員と数名の教員が普通教室で発表をした。三  
つの単語を使うことをルールとした。例えば、「海」という言葉の場合、「透明な海」というように説  
明をする（修飾語をつける）ようにした。これまでは、発信者側に重きを置いていたが、今回は、聞  
き手の立場を重視した。発表の合間や終了後に、「へえー」や「すごい」  
など、発表に対する反応を入れるようにした。最初に数人の教員が、見本  
となり、その後、単語を記入する用紙を生徒に配布し、10分程度の時間を  
与えた。また、順番は教員が作ったくじをまわし、生徒全員と教員の順番  
を決めた。用紙には、3つの単語を書くだけでなく、発表の中で、印象に  
残った言葉を書きとめる欄を設けた。発表者の一例を下記に示す。

生徒A「口が痛くなるほどしたトランペットの練習、ホームシックにな  
ったクラブ合宿、緊張したけどがんばったコンクール」

生徒B「吹奏楽コンクールで初の大阪府大会出場、そこで勝ち取った賞、  
充実した夏休み」配布した用紙を見ながら発表していた生徒もいた  
が、多くは、聞き手を見ながら発表を行っており、過去三回のセッ  
ションの成果が出た。

後半は、コンピュータ教室で実施した。参加校の生徒と教員で「学校紹介」をテーマにプレゼン  
テーションを行った。四回目のセッションではじめて、Power Point を使うため、教員による Power



思い出 発表



学校紹介 作成

Point の操作と、発表の中で「キャッチコピー」を入れることを説明した。キャッチコピーの代表例は、「やめられない とまらない かっぱえびせん」や「それにつけても おやつはカール」である。これらは最近、CM や広告物などでは不可欠になっているが、商品名やお店の名前が入っており面白



学校紹介 発表

みやインパクトにかける。そのため面白みやインパクトのあるキャッチコピーを作るように生徒に伝えた。Power Point の1枚には学校名・良いところや売り、2枚目には、キャッチコピー、3枚目には、工夫した点を入れて、30分間で作成した。Power Point の色合いの工夫や、プレゼンテーションでは目線をあげて話すこと、聞き手は、声を出して反応することなど、再度確認した。また、各学校に他校の教員も加わり、助

言を行った。発表の順番は、くじをひいて決めた。まず、教員チーム、そして OB (大学生チーム) の順でプレゼンテーションを行った後、春日丘高等学校は「ハジケル青春、磨かれる個性」、大阪信愛女学院高等学校は「ずっとこのまま・・・」、上宮高等学校は「未来へ躍進する上宮。未来に変わり始めた上宮。」というキャッチコピーを発表した。プール学院高等学校は新校舎が完成したばかりなので、それを売りにしてのプレゼンテーションを、最後の大阪国際大和田高等学校は、英語に力を入れている点から、「ほら、Kevin が呼んでいる」をキャッチコピーとした。

最後に、10月29日に行われる「プレゼン甲子園2006」に向けて、審査の基準(「画面」、「声の大きさ」、「何を伝えたいのか」等)を生徒に伝えた。そして、今日の感想や「プレゼン甲子園への意気込み」等を電子掲示板に書き込み、解散した。

その後、指導者のミーティングでは、今回のセッションの反省と、プレゼン甲子園のテーマ「世の中が良くなるよう、法律をひとつ作れるとしたら」を決め終了した。

成果：

生徒側は、前半の個の学びから、後半の学校単位のグループへの展開がうまく行えたこと、キャッチコピーを用いて情報を伝達する重要性やプレゼン甲子園の審査基準を伝えることにより、プレゼン甲子園への意識付けが行えたことが非常に良かった。指導者側は、教え方の工夫、グループ学習の指導法の取得が成果としてあげられる。

課題：

前半の生徒全員のプレゼンテーション、後半の Power Point の作成があり、時間の配分が非常に難しかった。第2回、第3回にひきつづきドミニカ共和国からのプレゼンテーションを計画していたが、時間不足で中止になったことが非常に残念であった。また、生徒が解散した後に行われた教員によるセッションの振り返りが不十分になったことが課題としてあげられる。



選手宣誓

#### 第5回セッション プレゼン甲子園2006

目的：

本年度プロジェクトの集大成として、前半には聴衆とともに各セッションの振り返りを行い、後半には各高校の生徒たちがセッションで得た成果を発揮するべく、プレゼンテーション発表を行う。

概要：

参加生徒の入場、選手宣誓に始まる開会式を行い、前半としてこれまで4回行ったセッションの振り返りを行った。その後、ドミニカ共和国に赴任している先生とのスカイプによる対話をし、緊張を和らげた。後半にはテーマを「世の中が良くなるよう、法律をひとつ作れるとしたら」とした、7校の参加チームによるプレゼンテーション発表を行った。テーマ選考は、できるかぎり夢がありながら範囲の広がり過ぎない現実的なもので、想像力を必要としながらまた、リサーチもできる高校生がアプローチしやすいものを基準とし、指導者の検討により決められた。今回のプレゼンテーション大会においては優劣をつけることとなり、リサーチ力、論理的思考力、構成力、表現力等の、プレゼンテーション能力を総合的に判断できるようテーマを検討した。どのチームも本プロジェクトで培い、各校で磨きあげたプレゼンテーションを多くの聴衆の前で披露することとなった。その後、エキシビションとして教員チームによるプレゼンテーション発表を行った。他校教員、本プロジェクトOG等、来場者より本日の感想を聞き、またこれまでのセッションと同様に電子掲示板（VBB = Virtual Brainstorming Board）を用い、参加生徒自ら振り返りを行った。最後に審査発表をし、審査員からの講評を聞き、しめくくりとした。

成果：

各校チームの発表は、「たばこ販売禁止・廃止・中止法」、さまざまな文化の理解・融合から世界平和につなげる「萌え文化振興法」、職業に希望を見出す「夢の仕事だ、ヤッ法」、「リサイクル法」、生命を大切にする観点から「誕生日法」、ヒートアイランド現象を緩和する「打ち水法」、「妊娠中絶禁止法」と多岐にわたり、それぞれの特性を上手くアピールする、持ち味を生かしたプレゼンテーションとなった。どのチームもこれまで学び磨き上げた力を存分に発揮しており、終了後も「楽しかった。」「またしたい。」という感想が聞かれた。5回にわたりおこなってきたセッションの成果が存分に発揮されており、生徒の自信につながる発表大会となった。指導者も後の振り返りにおいて、どの点に力をいれて各校で指導を行ってきたか、生徒の様子を話し合い、これからの指導につながる最終セッションとなった。



発表の様子

### 第3章 考察と評価

第1章で考察したように、本プロジェクトは真のプレゼンテーション教育を推進するべく活動を重ねてきた。相手に意思・意見・アイデア・情報を示し、相手に理解してもらい、さらに相手の意見・態度、ついては心を動かす自己表現・自己演出技術としてのプレゼンテーション能力を伸長し、そのために必要な相手との円滑なコミュニケーションをもつことを目的としてきた。

この目的達成の可否は、参加生徒が振り返った感想が証明できると考える。毎回のセッション後、生徒たちはVBBと称された電子掲示板に自分の思いを書き込み、成果と反省を確かなものとする。

その掲示板において、生徒たちは次のように書いている。「最初は緊張したけれど、自分の思い通りに話せた。」「楽しかった。」「人前で話すことに慣れていない高校生が最初のセッションの後に残した感想である。「緊張」という言葉が多く見られるが、プレゼンテーションに対する嫌悪感は見られない。反対に、積極性を持って次回に臨む姿勢が見られる。第1歩ではあるが、自己表現の喜びを知る機会を持つこととなった。自己紹介プレゼンテーションを行った後では、「もっと人に伝えられるよう上手になりたい。」「テーマを考えるのに時間がかかった。」「話を具体的に膨らませばよかった。」「自分のプレゼンテーションを振り返り、また参加者や指導者の自己紹介を参考にすることにより、相手に伝わるプレゼンテーションをするためにはどうすればいいのかを自分なりに考え、思いをしっかりと持ち、テーマや目的に沿って論理的に考えをまとめる方法を研究する様子が見えてくる。様々な関門を通し、伝達を行ったセッションの後には、「意見をはっきり相手に伝える。」「いろんな視点から考える。」「伝わりやすくするには、別の表現を考えることも必要。」「声のトーンや大きさで感情を伝えることができる。」と相手を引きつけられる表現で効果的に伝える能力への向上心が見て取れた。プレゼン甲子園前の最終セッションにおいて、振り返りを行い、Power Point を用いたプレゼンテーションを実際に行った後には、「短い言葉で伝える言葉選び、インパクトが大切。」「的確な写真選び、効果の使い方等、視覚でとらえることが、印象に残る、引き込まれるプレゼンテーションにつながる。」と自分の練り上げた内容を相手に分かりやすく資料の上で展開し、伝達する技術を認識したようだ。それぞれのセッションにおいてホームルームティーチャーは、活動を通して暗に示すものの、真のプレゼンテーションが何であるのか、明言しているわけではない。その中で、生徒たちは的確にそれを感じ取り、自分のものとしようと努力している。単に自己表現するプレゼンテーションはもうここには見られない。生徒の感想の中にはこんな言葉も聞かれた。「聞き手の心をつかむのは難しい。心をつかむ表現を身につけたい。」プレゼンテーションの最終目標、相手の心をつかむ、動かすことを目標に生徒たちは活動に臨んできたのだ。本プロジェクトが大前提として掲げてきたプレゼンテーションにおけるコミュニケーション能力の必要性に関しては、第5回となるプレゼン甲子園後にされた、「プレゼンテーションとは」の問いかけに対する生徒の答えが証明してくれるだろう。彼らはこう答えている。「口からだけではない相手とのコミュニケーション」と。これにより、本プロジェクトの目的の1つである高校生のコミュニケーションを基礎としたプレゼンテーション能力育成は証明できたと考える。

また、もう1つの目的である指導能力伸長に関しても次のことが言える。毎回の指導者ミーティングにおいて、また電子掲示板にある感想において、参加教員は次のような感想を残している。「初めて経験する...の活動を新鮮におもしろく感じた。自らの授業にも取り入れたい。」「セッションにおける指導者のコメントは重要であり、それぞれのホームルームティーチャーからそのコメント力を学びたい。」「先生方の行動における、学びの姿勢を見習いたい。」普段の学校生活・教員研修にはない、プレゼンテーション活動の企画・運営をともに体験し、その活動における教員と生徒の実際のやり取りを見聞きすることにより、これまで気づけなかった、また知らなかった良い指導方法、生徒との対話方法、反応の仕方を自分の活動に取り入れることができている。さまざまな科目、学校、経験の教員がともに同じ活動に参加することにより、学ぶことも多いようだ。また、活動の成果、反省を話し

合うことにより、真のプレゼンテーション教育に対する考え方をともに持つことができた。指導能力伸長を目指し、他の研修では得ることが難しい経験を手にしてきたと言える。

#### 第4章 課題と展望

本プロジェクトも4年目を終え、着実にその目的を達成しつつある。しかし、活動が進むにつれ、また新たに生じた問題も多い。

この4年間、6～7校の大阪の高校から生徒が参加しており、それぞれのセッション活動を行う上で適切な規模で進めることができているが、参加校が増加すれば、1箇所での実施が難しいことが予想される。多数の箇所を進めることとなれば、統一した見解が必要となり、これまでのように容易には運営できなくなることだろう。しかし、高校生のコミュニケーション能力育成と指導者の指導能力伸長のためには、参加者が増え、多くの人々が真のプレゼンテーション教育に接する機会を持つことが望まれる。これからこの問題にどのように対応すべきか検討していく必要がある。

また、4年間の活動を振り返ると、セッション内容を練り、より良いものとしてきた。指導経験・教科に関係なくさまざまな多数の指導者がホームルームティーチャーを経験するよう実施してきており、指導能力伸長に成果をあげてきているが、経験豊かな教師とまだ浅い教師、または教員を目指す学生との上手な連携がこれからの課題ともなる。

この4年間において、本プロジェクトが果たしてきた役割は大きいと考える。高校生にとっても、指導者側にとっても実際に体験し学べる機会を提供し、高校生のプレゼンテーション能力育成・指導者の指導能力伸長に貢献し、学校教育の現場において利用できるプログラムの提供を行ってきたと言える。今後も目的達成に向かい、課題検討に励み活動を進めていくことが重要だと考える。

#### 参考文献

- 五十嵐 健 2003 「プレゼンテーションの勝ち方」 日本放送出版協会  
小宮 清 2004 「シンプル・プレゼンの技術」 日本能率マネジメントセンター  
永山 嘉昭、山崎 紅 2003 「説得できるビジネスプレゼン 200の鉄則」 日経BP社  
三宅 隆之 2006 「実践プレゼンテーション入門」 慶応義塾大学出版株式会社  
村松 かすみ、中嶋 秀隆、マット・シルバーマン  
2006 「できる・使える プレゼン術」 日本能率マネジメントセンター